

平成28年、十二支会例会参加記

改稿 南連記 王岡憲明 記

実施日 28年1月8、11日

1月8、9日

我が家を出て当日、本宮経由、田巴へと考
えていたのが息子は串本経由、田巴へのこ
とで西に向きを変えよ。那智勝浦温泉病院に
去る八月から入院して難病と斗っておられ
根木扶美代さんと看病の根木俊明氏に内心
びなから心なすも素直りさせて貰う。

十二支会も今回で57回目と数えられた。
26回目の四国愛媛県の牛ノ峰では60支の還暦
を祝って頂いたのとはじめ古稀、耆寿、傘寿
傘寿と数多くお祝いして頂いた。

今まで順調であつたが、二年前にかとした
不注意から一酸化炭素中毒をおこし、歯肉の
二人の女性に大変心迷惑を拂けてしまった。
以来、体調は仲々正常には戻って来ない。

十二支会と私山参るよと私の関係と
同じで仲良くても叩きなさいと成りなっている。

今回、息子の明が同行してくれ、な
 ったので介護付きでどうやら参加させて貰う
 ことになったのであります。
 宿舎に着いて参加者名簿表を拜見すると、
 会員数78名の内、参加者は43名、会員以外か
 らの参加申し込み名を加えて54名との倍しざで
 あります。あと三回で先結と出ると云うのに果
 して先結と出えることかお未子のであろうか。
 会長はじめ幹事の方、又、会員の方々に御調
 して貰えるように全合一致して先逝と目指し
 て貰いたい。改善点として

一、開催時期、桜の季節、のびやかに山頂に
 集うこと。寒い時季を避けること。

二、最終回は伊勢の山の候補に上かっ
 て、伊勢の獅子舞いと掲いで適じて

三、^{えんたね}賞 ^{おまじな} ^うば ^ば如何？
 禮正縁跡金ほ寧にしても良いので永身の

貢献者を表彰するとか、何か記念品と存
 て報いるとか、そんなりに全会員に慰画を

しほつて貰う。

折角、中国地方の西端まで来たのだが、
 本番の一山に到っては物足りない。越せぬと他
 に一山ぐういは縁がたいものと金花康彦氏の
 苦心の傑作可動長蛇野へのいざない丘を繕い
 て我らに倣合った山を探す。
 ほどくの高度と登山口が到り易い矣。下
 山してから山口市の会場に程近いという^{事件}
 の山として可江^{イノホ}嶺山へ^{山△山ノイノトル}丘を^丘選ばせ
 て頂いた。内司^{フエリ}で降りて下洞に渡り朝方の静
 かな国道へ或は高速道かへを走る。この辺りには曾
 った鬼ヶ岫山や竟王山に来た所り逼った辺り
 で沿道に薄く残っている。息子の車のカーナ
 ーに専かされて、すんなりと目的の林道に入る
 ことの出来。金花氏の素因置にあつた石垣の
 跡も見出してひと安心。正もとを因めてブル
 ドーザで踏み固められた斜面を登り出す。
 道ではないのので歩き辛い。やがて二人もりと
 繁った杉林の中で石左に一本の横径があり、
 石に板をて疎林の尾根を辿る。少しは登山者
 も訪れるらしく所々に朱のテープを取り付

らいており、我々西名も木枝と手折って山頂
と目指した。

舟も出て来て息も印此。息子にこの上の

ピークに三角尖はあり^{ヒツウカ}。確^カ堪してくれとバト

ンと譲る。程なく三角尖らしき礫石があつた

と引返して来^正れ。又^カれく一山橋^カた^カ

とひと安心。頭の欠けた三角尖礫石のみり三

等あつたと確定した。山頂一帯はまほ^カう^カ置

察で録でも持参した。山頂に散^カを

と表すれは^カ良かつたのには少^カな^カ。どこかの

山岳会の本^カントか一枚器けり水であつた。

と子はそれを入れた一枚の品と指つてく

り。又^カ対側の尾根は急峻で^カ取^カて^カ元の^カコ

ースと取つて引き上げた。

前夜祭 / 月9日 山口市湯田温泉・常盤

ホテル

18時 懇親会開会、堀会長挨拶から始ま

って川島・林 両幹事の進行で全員落着いた。

齋藤信生先生は矢張り腰に布巾があつて叫^カび

席、いつもお供の中川 量反と田中セツ子さ

人も見えておられぬ。大者が扱けり大黒
 程のないうで何人ともなく締まりかぬ。
 たるお酒の差入れはスラリと並んで唯一景気
 すけ^うでいる。この酒の差入れは幹事として経
 費と多くする上は原麴いせうである。
 我々の伊田も全負荷^つている。遠い頑^ん張^か
 の鴨岡 茶さん^お見^えで^て命^{めい}興^{きょう}の踊^{おど}りに^は華^わを
 添えて下さるといふ。私も少^ちしでもお返しぬ。
 とおひねりの代りに用意した。
 出雲の勝部洋一さんならば見事な素振りです。

いよう揃いの踊りをやつて下さるのらか
 ここに三年曲^{まが}欠席で淋しい限り。
 最後のメクリは林 一夫さんのヒヤテト
 エ節と纏まくりで御披露して下さり前夜祭を
 盛り上げて下さった。

私は何の志もないか、河村 清さんとせめ
 て十二支公の古株として、あと三回の創命に
 なんとか参加して盛り上げようと誓ったもの
 であつた。

本番の山 猿ヶ嶽 (四日 42.8 6ヤートル)

地図

小郡コゴロ

1月10日

晴

選^ハりぬたこの猿ヶ嶽も金光さんの著書から
 見付けられ、下見にも止と運んで下さり、頂
 上部命の刈扱や霞塔からの頂上に至る間の
 段差作り、~~手~~手外り用のユーフ取付けなど、僅分
 と牛車入れて下さ。そのことである。頂上
 直下の岩場部分は登りなすは左程の距離では
 なり、下降となる私としてはヒビヒビしてし
 まいそうで大変ゆかった。

香藤先生としてもお見えになられたうほ長ん

下さったてあさう。私は前以って息子の種
 即ガイルと用意してくれたので心おきなく下
 ることか出来た。
 頂上直くの雑木林の稜線では何故か紅州の
 山と錯覚するよな雰囲気は中国地や西部に采
 石感いかしなかつた。樹も仲間内のひとつて
 ある。セツとしたガイルは成る可くならは腐
 朽しない内に解いてやっで欲しいものがある
 木の成長と共に幹はぬいじんで見ても痺々し
 い恰好になつているのとよく教員する。

鈍行列車はようやく一司を待たせて到着。

堀義博会長の発声で高らかなパンザイが轟

いた。続いて恒例の祝賀式となる

遷曆は地元、山口の林和子さん。

古稀は秋うの仲間、前田正君、

奈良の中谷絹子さん

岐阜の今峰正利さん

会長の堀敦博さん（岐阜）

長寿は京都のリチャード・スマイナール

長寿は東京の清水千枝子さん

福井の立川義秋さん

以上お名のオマ

欠席された方は

遷曆 岐阜の野々部節子さん

長寿 埼玉の中田勇さん

岐阜の猪又敦子さん

奈良の中野聡氏

長寿 和可山の熊本哲三さんら

会長より夫々の以上お名のオマであつた。

身にお祝金の贈り、日本海と太平洋の

銘酒の朱盃に注ぎ込んで合杯せよと存じます。

出	登	時	に	頂	いた	さ	ビ	ール	(ハ	ン	ア	ル	ユ	ール)	と	朱	当
で	登	心	とな	る。	尾	根	を	蹴	え	る	風	は	少	し	巻	く、			
南	側	の	斜	面	に	陣	取	つ	て	よ	ほ	り	る。						
い	つ	も	の	こ	と	な	か	ら	食	事	の	音	を	と	「	流	水	解	散
の	通	り	の	一	司	、	腰	を	上	げ	帰	心	矢	の	如	く	山	頂	を
あ	と	に	す	る。	元	来	に	ユ	ー	ス	と	下	る	の	で	あ	る	か	
さ	何	も	心	配	す	る	こ	と	ほ	な	い。	石	か	、	い	さ	、	か	
湖	い	に	欠	け	る	こ	こ	ろ	か	あ	り	そ	う	で	あ	る。			
昨	夕	、	銀	現	公	の	配	所	を	以	て	取	集	に	あ	っ	る		
「	今	日	の	日	は	さ	よ	う	な	ら	」	ぐ	ら	い					
天	々	合	唱	し	て	は	ど	う	ひ	あ	ら	う	か						
作	詞	、	作	曲	金	子	詔	一											
一	い	つ	ま	で	も	過	え	る	こ	と	な	く							
友	別	さ	で	い	よう														
明	日	の	日	を	夢	見	て												
希	望	の	道	と															
三	三	略																	
新	宮	組	は	い	つ	も	ラ	ス	ト	を	承	る。	山	口	グ	ル	し	ブ	
の	方	々	敷	石	も	残	ら	れ	て	あ	と	片	す	け	て	し	て	急	い
で	題	け	下	る。	登	山	口	の	分	一	ト	に	は	早	や	「	さ	ら	ば

又逢う日までしの横断幕が掛けられていた。
二世目の子ノ伯以来のもので参加された皆さ
んはなつかしんでくれる。

さうば又会う日まで山口市小鱈公民館。

山口ブループの方々や小鱈公民館の方々に大

変お世話になつて今回の十二支会も無事終了

しむ。私ほ息子^{川柳}と新客の仲間にも別れを

告げて山陽道を去へと志す。早稲前の木テ

に泊つて翌日、長く好評を博している、戦

艦大和(模型)の展示場と妙歩で参観し、之亦

帰心矢の如く岡山、姫路、吹田と正リ板け

伊勢^道經由で伊時帰老した。体調いまいとつで

あつたが息子のサポートのお蔭で57回の創

会に参加出来た中ゆいである。